



Title	市民的道德のイデオロギー批判 : 30年代ホルクハイマーの人間学的研究をめぐって(1)
Author(s)	森田, 数実
Citation	年報人間科学. 1999, 20-2, p. 257-272
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7075
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

市民的道德のイデオロギー批判

—— 30年代ホルクハイマーの人間学的研究をめぐって(1) ——

〈要旨〉

30年代のホルクハイマーは、彼本来の人間学的関心を社会理論に組み入れる形で発展させていった。本稿は、そうした人間学的研究のもとに行われた彼の市民的道德批判を検討し、その批判の人間学的基礎を明らかにすることを目標とする。

本研究ではまず最初に、この時期のホルクハイマーがとったイデオロギー批判という思考様式について考察し、それを主体把握の社会科学、心理学的脱中心化の傾向のなかに位置づけ、彼に対するマルクスとフロイトの影響という問題に、ひとつの統一的な解釈を提出する。それを受けて、ホルクハイマーにおける市民的道德のイデオロギー批判が、市民社会の生活過程、とりわけ道德の支配に関わる機能から考察されていることを明らかにする。エゴイズティックな経済・社会原理とは裏腹に、道德においてはエゴイズムの弾効が熱弁をもって語られており、そしてそれは、一方では競争原理の制限に、他方で大衆の欲求の内面化に寄与する。次に、矛盾に満ちた市民社会の交換関係を媒介する一契機として市民的道德を捉えるこ

うした視座が、さらに市民的指導者の社会的機能についての優れた構造分析によって重層化されていることも指摘する。これまでのホルクハイマー研究においては、ド・サドやニーチェといった思想家に対する彼の終始変わらぬ関心と彼の社会理論との関連は、ひとつの空所をなしており、本稿は、それを埋めるひとつの試みである。

森田 数実

キーワード

ホルクハイマー

批判的理論

イデオロギー批判

市民社会

市民的道德

I イデオロギー批判と人間学的関心

三〇年代のホルクハイマーが遂行した理性批判の作業が、イデオロギー批判と称される思考様式に基づいていたことはよく知られている。彼は超越論的哲学の内在的批判、とりわけカント哲学の批判を、一般に西欧マルクス主義といわれる思考様式を導入することで、それまでとは異なる方向へと転じることでさらに発展させていく。その際、彼の念頭にあった中心的な問題は、自らを自律的と見なすような主体の概念はもはや維持できないという、時代がその深部で経験していた事態であることは確かだと思われる。この事態の解明、さらには克服のために彼は、イデオロギー批判の思考様式をとるわけだが、その際に彼が追究する問題は、狭義の認識論的問題にとどまらない拡がりを示している。筆者の考えでは、彼はこの思考様式のもと、一方で批判的理論という、自らと学派の立場にとつての哲学的基礎を確立する試みを推進すると同時に、他方では彼本来の人間学的関心を深め、いわば近代の市民の人間の自己認識ともいふべき作業を遂行していた。この彼の独自の人間学的研究の解明が本稿の課題をなすが、そのためにはまず、彼がイデオロギー批判に込めた意味の考察が必要とされよう。

ホルクハイマーの西欧マルクス主義的思考様式受容の背景に、当時の真理問題をめぐる論争があつたことは容易に推測される。理論、広く観念というものは歴史的・社会的に規定されている、とりわけ

階級闘争を基礎とした政治的闘争に規定されているというマルクス主義的テーゼは、衝撃力の強いものだった。意識の歴史的・社会的規定性のテーゼは、主体の社会的脱中心化ともいふべき傾向を強め、それは相対主義をめぐる問題に典型的に現れてくる。西欧マルクス主義を駆動するエレメントのひとつがこの問題であることは、例えばメルロ・ポンティの研究などから窺うことができる。⁽¹⁾ こうした状況のなかでホルクハイマーがとる道は、ルカーチによる階級意識論に基づく「歴史哲学的」解決⁽²⁾でも、マンハイムによるイデオロギー概念の一般化、および知識人によるその鳥瞰・診断という相関主義⁽³⁾でもなかつた。

彼によると、一方では、形而上学の崩壊の後では、いかにしても現実と観念との同一性ということは維持できず、他方では、部分的立場を寄せ集めたところで「全体的」立場は得られない。すなわち彼は、両者の試みは、いまだにあまりに強く形而上学的欲求に支配されているというのである。彼はマルクス主義的なイデオロギー論の提起した問題を、理論と実践の関係の問題として、いわゆる批判的理論という立場の構築によって引き受けようとする。⁽⁴⁾ その際彼がマルクス主義的イデオロギー批判から学ぶ中心的な事柄の一つは、その形而上学批判、幻想批判の方法としての強みである。言葉を変えれば彼は何よりも、世界を魔力から解放するための思考手段として、イデオロギー批判的思考様式を用いようとするのである。

この思考様式においては、さまざまな観念の持つ意味内容は、社会との関連で規定される。すなわち、観念論のいうようなそれ自体

で自立した観念の領域が存在するのではなく、人間の抱く観念は、彼が置かれた歴史的・社会的状況との関連でのみ理解される。ホルクハイマーは、このように観念を歴史的・社会的に解読する場合のみ、その観念の人間と社会にとつての意味が明らかになる、換言すればそうした観念の真理内容を救うことができるのは、それを社会という事実的存在との関連で扱う場合のみであるとすると立場を取る。文化の社会的・支配的機能の批判と結びつく彼のこの立場は、主体の社会的脱中心化というテーゼを、新たな絶対的真理の探求を強いるものとして、いわば消極的に受け取るのではなく、むしろ啓蒙の一層の展開を促すものとして積極的に受け取るものといえよう。彼はこの認識過程に、いわば人間解放の基礎を求めたのであり、それは彼の反哲学ともいべき立場を示すものでもある。

ところで、ホルクハイマーが主体の脱中心化ということで視野に入れていたのは、社会的なそれだけにとどまらない。それとともに彼は、自らの人間的関心とも深く関わるものとして、主体の「心理学的」脱中心化に着目していた。フロイトが道を拓いた深層心理学は、意識の機能は心の無意識的な過程との関連ではじめて明らかになるということを示証することにより、絶対的に妥当する真理の幻想を破壊するかに見えた。しかしホルクハイマーは、この場合も形而上学的欲求の充足といったこと、例えば「生」や「性」といった欲望とその充足との実体化・絶対化を結論として導くのではなく、それをより一層の啓蒙という認識過程へと組み入れていく。

彼にとつて精神分析的研究とその成果とは何よりもまず、人間の

内的因子と外的因子との相互作用のなかで欲求、あるいは衝動が変換されていく過程の理解に資するものなのである。衝動の変換との関連で知覚から悟性・理性という心的機能の成立を理解する可能性が生まれたことは、一定の人間類型の心的装置のあり方および衝動状態に対して、以前とは比較にならないほど立ち入った把握が可能になることに等しい。ホルクハイマーにとつての問題を端的に言えば、相対主義、さらにはニヒリズムの問題の背後に存在する市民的個人という人間類型は、その抽象的、表面的な自己意識と自由、人間性といった理想にも拘わらず、衝動的に問題のある状態にあり、一定の状況のもとでは人間否定的な行動へと駆り立てられる可能性があるということである。先の場合と同じくここでも彼は、隠された衝動の状態も含めて自らの心的状態の認識によつて、その衝動の無意識的支配から脱することに、自由と解放への契機を見ようとしている。そしてこの箇所までくれば、こうした彼の思考と、彼の人間学的関心との結びつきは、自ずと明らかになってくる。

ホルクハイマーは終始、マンデヴィル、エルヴェシウス、ド・サド、そしてニーチェといった、いわゆる市民階級の「暗い」思想家たちに関心を寄せている。とりわけニーチェによる自己の没落への意志および道德の系譜学の展開は、彼の思想の構成要素の一つといつてよいほどの重要性を持つている。これらの思想家は、啓蒙主義的、理性的な人間観に対する、いわばひとつの憎しみを梃として、その人間の持つ暗い側面に分析の手を加えた。彼らによるエゴイズムと残忍性の分析には、市民とそれを生み出した文化に対する告発

と、啓蒙の過程をさらに押し進めようとする意志とが同時に存在しているというのが、ホルクハイマーの彼らに対する判断といつてよいだろう。市民的人間の、抑圧された無意識的な心的世界とはいかなるものか、この理解には、なにもフロイトを待つ必要はないわけである。しかしホルクハイマーは、人間の心的世界の認識に関して、やはりこうした思想家とは距離を置こうとする。それは、認識に対する彼のほるかに積極的な態度による。

憎しみを梃とする市民的人間の分析が、いかに深いところまで達しようとして、社会という水準、およびそれと関連する明確な概念的認識を欠く彼らの分析は、ホルクハイマーの眼には、やはり恣意的なもの、すなわち繊細でありながら粗雑であると映る。例えば「生」や「権力への意志」の実体化は、彼には認識の中断と思われるだろうし、また超人の仮定や、認識を権力への意志の幻想とみることとも、現実の批判から一気に現実を飛び越えてしまうような、制限されているとはいえその限りで正当な認識の権利を否定するものと映るであろう。彼の人間学的研究は、ショーペンハウアーやニーチェが別扶した市民的人間の心的なあり方を、イデオロギー批判の思考様式に組み入れるところに成立する。彼らの分析はそこで、独自の修正を含めて批判的に受容・展開され、市民的人間の自己理解に役立てられる。この認識過程こそが、ホルクハイマーが人間の解放といったことを託す媒介であること、いま一度確認しておきたい。

さて、三〇年代のホルクハイマーの作品のなかに、こうしたイデオロギー批判に基づく人間学的研究を探ると、それが少なくとも三

つのテーマのもとに行われていることが分かる。まず第一に挙げられるのは、社会研究所の学際的研究「権威と家族」に関する研究^⑤である。ホルクハイマーは、彼のいう学際的唯物論の具体化であるこの研究の理論的構想を提示するなかで、彼の人間学的関心を社会を媒介として追究している。次に挙げられるのは、彼にとってひとつの中心の問題である市民的道德を扱った研究である。彼の論文「エゴイズムと自由を求めぬ運動」^⑥は、アドルノがニーチェと関連づけていることから分かるように、^⑦ニーチェの問題へのホルクハイマーの論究と解することができる。この研究は、人間学的研究に関して学派の他のメンバーに影響を与えたことが知られている。^⑧そして最後に挙げるべきは、市民的懷疑を論じた彼の研究である。「モンテーニュと懷疑の機能」と題された彼の研究^⑨は、市民的精神の特徴把握を基礎に、モンテーニュからヒュームを経てさらに權威主義的国家の時期に至るまで、市民的懷疑をその社会的機能と個人にとっての機能の観点から追求したもので、やはり学派の仕事に理解と関心を示す読者から高い評価を得た研究である。^⑩

以下では、第二のテーマ、すなわち市民的道德をめぐる研究でホルクハイマーのいうところを、次のステップで再構成・検討しよう試みてみたい。まず、彼が市民的道德を、そのイデオロギー批判の視点からどのように捉えているか、その基本的枠組みを検討し、(二節)それを踏まえてさらに、市民的道德の矛盾に満ちた社会的定着を、市民的大衆運動が示す構造と独特の社会心理学的現象を例に具象的に論じるホルクハイマーの説を大まかに検討し、(三節)そし

て最後に、市民的道德の、とりわけ人間否定的な帰結についてのホルクハイマーの分析を検討・考察してみたい。(四節)

三〇年代ホルクハイマーの市民的道德に関する研究は、これまでにそれに相応しい扱いを受けてきたとは言いがたい。この研究上の空所を埋め、彼の思想およびその置かれた時代の理解を些かなりとも前進させるのが、筆者の願いである。

II 市民社会とその道德

市民的道德のイデオロギー批判は、市民時代に有力な人間学的思想を、その根底にある市民社会のあり方から解説していく。すなわち、市民時代には人間本性がどう捉えられているか、そしてそれを基礎に人間の徳とはどのような性質を持つべきと考えられているか、そうした思想を、ある超越的な対象を指示する言説としてではなく、市民社会の構造を前提に解釈していく。その際、人間学的思想の意味解釈は、その字句内容そのものの丹念な読みを前提にしつつも、それが置かれた文脈という観点から、一定の角度、また一定の意味選択の原理に基づいて行われる。ホルクハイマーに従うなら、言説の真理内容は、このように言説の置かれた文脈、彼自身の言葉では前提(Bedingungen)を考慮に入れてはじめて取り出すことができる。それを踏まえてさらに、そうした一定の社会的、理念的条件のもとにある人間の経験(Erfahrung)の世界の理解がめざされる。すなわち、幻想の破壊の後に現れてくる、そうした幻想を必要とする人び

との、心的媒介も含めた現実の世界の理解がめざされるわけだが、^①この節ではまず、ホルクハイマーによる市民時代の人間学的思想およびそれと関連する道德的思想の、市民社会からの解釈をみてみたい。

彼によると、市民時代には人間本性の捉え方に関して、一見すると互いに矛盾するような二つの精神的潮流がある。^②マキャベリに代表される性悪説的潮流と、モアに発する性善説的潮流である。一方の立場は、人間本性は悪であり危険であり、強力な支配機構によって締めつけられなければならないとシニカルに告知し、またそれに対応するピューリタンの教えは、個人は罪深いものであり、鉄の紀律と義務の掟への絶対的服従によつて自らの衝動を抑えなければならぬと言いつける。他方の立場は、人間は本来純粹で融和的な性質を持つており、ただそれが現在の偏狭で墮落した諸関係によつて阻害されているだけだと断言する。しかしホルクハイマーは、それらを仔細に検討してみると、両者に共通である一つの傾向が浮かび上がってくると言う。それはエゴイズム、それどころか享受一般の弾効という傾向である。

すなわち彼は、性悪説的立場においても性善説的立場においても、あらゆる利己的な衝動の動きに対する絶対的拒否・拒絶は自明の前提となっているということを、まず指摘する。そして彼は、このことを市民社会の現実から解釈する方向へ論を展開する。ここでも最初に目に付くのは、そのことと実践との矛盾である。市民社会は、その支配を増すほどに人間の本性の利己的で、排他的、敵対的な側

面を陶冶するからである。ということとは、社会的現実を實際上支配している原則とは矛盾する衝動状態が、いわゆる徳として告知されていることになる。ホルクハイマーは、宗教、形而上学、さらに道徳的熱弁は、人間が根底に存する歴史的世界のなかで、その世界自身の協力の下で必然的にそう成らざるを得なかった、そういう人間の対立物に即して人間をはかるといふ任務を果たしている、と指摘する。彼は、市民時代の人間の分析は、この矛盾によって妨げられ、そして歪曲されたとも言っている。

そして彼は、こうした理想主義的道徳の必要性を、市民社会の構造から、とりわけ市民階級の置かれた経済的状况から生じるものと把握する。彼によると、自由競争には、それ自身の先駆者や擁護者に従ってさえ、一定の歯止めが必要である。自由主義の原理が法と伝統の枠のみによって制限されるのは、一九世紀の一時期のイギリスの特殊事例であり、その原理によって社会の全体が所与の形式で再生産されるためには、いつも広範囲にわたる国家的措置が必要だった。個々の経済主体の視野を超える社会的利害は、法的、経済政策的の制度やそれ以外の国家的制度のほかに、教会組織と私的組織、および哲学的に基礎づけられた道徳によって守られた。したがってホルクハイマーは、理想主義的道徳の原因の一つは、競争原理に支配された時代にあつて、競争原理の広がりや阻止しようとする社会的欲求にあるのだと言っているのである。その限りで、道徳化された人間考察のなかには、合理的な原理が、神秘化された、理想主義的な形態をとって現れているということになる。

このことと同時に彼が指摘するのは、理想主義的道徳の支配手段としての機能である。彼によると、社会に適合していない衝動の拒否は、社会的支配の厳しさから理解される。すなわち過去数百年の貧しい人びとに対して、相互競争を抑制しよう説教する必要性は少なかった。彼らにとって道徳とは、柔順、自己謙讓、規律、全体に対する犠牲、つまりまさに彼らの物質的欲求の抑圧そのものを意味すべきものである。だから互いの間での競争は、むしろ反対に歓迎すべきことであり、これを経済的、政治的種類の連合によって緩和することは、妨げられた。以上から明らかなようにホルクハイマーは、エゴイズムの批判のなかでは、一般的な社会的動機と、階級的動機という二つの動機が浸透し合っていると考えている。そして彼は、市民的道徳の支配手段としての意義と、その抑圧の実践に言及するなかで、市民社会の支配の厳しさを浮き彫りにしていく。

彼は、市民的道徳の支配手段としての意義は端的にいえば、大部分の人間に、幸福に対する自己の要求を押さえることに慣れさせる点にあるとする。すなわち、いい生活をしている少数の者たちは、まさにそれゆえに自分たちの生活が、厳密に考えた場合にはこうした有用な道徳的評決によつて有罪とされることを、喜んで甘受したが、大部分の人間は、そうした少数の者たちと同じようないい暮らしをしたいという願望を、抑圧することに慣れなければならないのである。さらに彼は、この市民的道徳の持つ支配手段としての意義は不断に重要性を増し、全体主義国家のもとでは、精神的な生活全体がもつばら大衆の操作の観点から把握されるため、道徳の進歩的、ヒュー

・ マニズムの要素が意識的に削り取られるという状況に至っているとする。

そこでは、支配層の平均的成員は、心の内奥では最も狭い意味における利己的な動機以外の動機を理解することはほとんどできないのに、その動機が皆の見て前で説いて回られると、彼はひどく憤慨した態度を見せる。ホルクハイマーは、戦鬪的國家の「聖なるエゴイズム」は、大衆個人にとつてはむしろ自己利害のまさに反対物であり、彼を幸福・安楽・自由の放棄へ駆り立てるもので、それは社会の少数集団の攻撃的な傾向を示すものであり、大多数の個人の幸福とは何の関係もないと言っている。以上のことを踏まえて彼は、おそらく彼をして市民的道德の批判へと向かわせたであろう、市民的道德の問題を孕む人間への機能に言及する。ホルクハイマーは、哲学のなかに衝動活動の禁止として表われているものは、現実の生活では衝動の動きの抑圧の実践であり、そこに市民社会の支配の非合理性が集中的に現れていると考えているのである。

西欧近代の市民社会においては、あらかじめ示された軌道に沿って動かかなかったすべての本能、無条件の幸福への要求のすべては、「公共の福祉」に関係づけられた「道德的な」努力のために迫害され、抑圧された。この支配の非合理性は、次の点にある。公共の福祉が、大多数の人びとの最も直接的な利害と矛盾する程度に比例して、心的エネルギーが社会的に許容された形式へと移行することは、合理的基礎づけを与えられることができないものとなり、社会は大衆を手懐けるために、物質的強制のほかに、宗教と形而上学に支配され

た教育を必要としたという点である。

彼らには、暴力と説得のあらゆる手段をもって、自己規律と、彼ら相互の間ならびに支配者に対する協調性が教え込まれた。ホルクハイマーは、個人は調教された、と言う。彼らは、公的な、彼ら自身の表面的な意識においては、ついに道德的存在になつていた。彼らの心の奥底には、たしかに悪しき衝動と情熱がまどろんでいたかもしれないが、しかしそれらには弱く、いまわしい性格のみが帰された。進歩の重荷を背負わなければならない大衆は、いわば理想主義的疎外を媒介として市民社会の厳しい現実に適合しなければならなかつたと言えよう。¹³ その際、エゴイズムに対する戦いは、感情生活全体と関わり、最終的には合理化されない、つまり正当化の根拠なしに追求される自由な快樂を攻撃する。

すなわち至る所で市民的人間学の基礎となつている模範的人間は、享受に対して制約された関係しか持たず、その模範は、「より高い価値」に準拠している。真の人間を規定するのは義務・名誉・共同体であり、これが動物に対する人間の優位をなすものとされる。文化的価値に対する権利を要求するあらゆる行為にあつて、最も強い強調点がおかれるのは、快樂動機が決定的に関与していないということである。さまざまな文化装置がつくり出そうとする喜ばしい気分は、規格化されたものであり、現実が生との内的調和を欠いているため、それは人間をいかがわしいものにする。ホルクハイマーは、市民的人間類型にあつては直接的快樂に対する能力は、品性の向上と自己否定という理想主義的な説教によって弱められ、粗雑にされ、

多くの場合、まったく失われてしまったと言う。そして近代社会の支配関係を以下のように定式化するのである。

「個人が抽象的な自己意識の状態に達した歴史過程のなかで、隷制が廃止されることによりたしかに階級社会の一形式は廃止されたが、しかし階級社会の事実を廃止されず、こうして人間は、単に解放されたのみならず、それと同時に内面的に奴隷化された。近代において支配関係は、経済的には経営主体の外見上の独立性によって、哲学的には人間の絶対的自由という観念論的概念によって覆い隠され、そして快楽の要求の抑制と根絶によって内面化される。この文明化の成り行きは、たしかに市民時代のはるか以前に遡るものであるが、しかしそれは市民時代のなかではじめて、典型的な性格類型の形成と固定化に至り、社会生活にその刻印を押ししたのである。」¹⁴⁾

ホルクハイマーは、矛盾を孕んだ市民社会の原理の実現を媒介するひとつの契機として、市民的道徳を捉え、その場合特にその道徳の支配手段としての機能を、衝動に対する抑圧機能を視野に入れながら認識しようとしていたと言えよう。ところで彼は、この市民的生活形式の覚醒と拡大の過程は、市民的大衆運動によって際立っているという事実を指摘し、その運動が示す社会心理学的現象のなかで市民の人間、とりわけ社会的に重要な市民階級の集団の構成員における道徳と、それに矛盾する心的態度・行為様式との間の関連が露わになると言っている。おそらくナチズムの運動を念頭におきつつ彼は、この人間類型の粗野で残忍な性格特徴を制約している社会

的布置を分析することで、市民社会の支配の特性、とりわけその非合理性を具体的に浮き彫りにしようとする。次節では、この布置の分析のためにホルクハイマーが展開したカテゴリーの概略だけを描いておきたい。¹⁵⁾

Ⅲ 市民的大衆運動の構造

ホルクハイマーによると、リエントツィに率いられたローマ市民の運動、フィレンツェでのサヴォナローラの興隆と短期間の栄華、宗教改革、そしてフランス革命は、市民的生活形式の拡大・定着への寄与という共通の歴史的意義を持ち、そしてそれらの社会運動の基礎は、共通の典型的な構造を示している。一方で、都市の市民階級は、彼らの特殊経済的利害を持っている。産業を制限する諸関係や法律の撤廃、中央管理の経済領域や規律ある軍隊の創出、文化生活の国家機関への従属およびそれに対立する権力の消滅、彼らの考え方によって規制された裁判、そして交通の安全と迅速が必要とされる。他方、都市と農村のプロレタリア化した大衆は、常に広範囲にわたる利害を持っていた。社会的不平等がどんなに社会の進歩の歴史的条件だったにしても、被支配者の悲惨な状況には、平等と正義へのユートピア的願望が適合した。

さて、市民階級の利害は、それが所有権制度に関わる限り、大衆の利害とは一致しない。より理性的な行政を求める自らの要求を、絶望した大衆の助けを借りて封建権力に対して押し通し、同時にこ

これらの大衆に対する支配を確立しようとする市民階級の努力から、これらの運動は「民衆」のためのものである、という独特の形態が生じる。民衆は、国家的改革によって結局は自分自身にも利益がもたらされるであろうことを悟らなければならない、というのである。しかし新しい自由は、自分自身と自分の家族に対する各人の一層強い責任、各人が教育手段によって促される責任と同義である。各人に良心を持たせなければならない。彼は、市民的自由のために戦うのだから、同時に彼は、自分自身に打ち克つことを学ばなければならない。大衆は市民革命によって、個人主義的社会的の厳しい現実に導かれたのである。

ホルクハイマーによると、この歴史的状況が、市民的指導者の本質を規定する。市民的指導者の行為は、有産階級の特権な集団の利害に適うものである一方、彼の態度と情熱には、大衆の苦しみ響きわたっている。彼は、大衆に欲求の現実的充足を与えることが決まらず、むしろ彼らを、彼ら自身の利益と不安定な関係にあるような政治のために味方につけようとする。だから彼が、自分の目標との合理的な合意によって信奉者を自分に引き止めておけるのも部分的にすぎず、彼の天賦の才に対する感情的な信仰、単なる熱狂は、少なくとも理性と同じくらい強い必要がある。禁欲的な厳しさと一緒に正義の熱情、気楽さや享受に対する敵意とならぶ一般的な幸福の要求、貧しい者と富んだ者と同じ愛情で包みこむ正義、上への加担と下への加担との間の動揺、自らの政治の受益者に対する修辭的な反抗と彼の政治に力を貸して勝利を得させるべき

大衆に対する現実的な打撃——こうした指導者の特質は、市民的世界のなかでの彼の役割から生じてくると、ホルクハイマーは言っている。

さらに彼は、この運動の媒介要因として次のようなものを挙げている。まず、指導者は、大衆に直接自分で影響を与えることができない限り、下級指揮官を必要とする。この場合にホルクハイマーが強調するのは、指導者と被指導者、最高指揮官と下級指揮官との間の心理学的契機の重要性である。明確な利害の布置が欠け、そのことから生じる目標設定の曖昧さは指導者の意識にまで達するため、下級指揮官は、自分が扱った所にできるような内容ある政治的原理をごく限られた範囲でしか持つことができず、したがってこの運動の経過のなかでは、個人的な親愛関係と対抗関係が、抜きん出た位置を占めるからである。

次に彼は、象徴、すなわち儀式や衣裳、さらにまた意味の曖昧な大言壮語といった、旗や紋章と同じような神聖さを得ることのできるような象徴の顕著な重要性を指摘する。それらも大衆を、彼ら自身のものではない政治へと非合理的に結びつける必要性から生じる。大衆の啓蒙と知的教育は、ことに市民階級が勃興しつつある時代には、時代遅れの封建的形態から社会を解放するのに欠かせないものであるにしても、にも拘わらず他方で、「人格」、事物、あるいは概念という形で偶像の建て直しを図ろうとする努力は、大衆を社会の特定集団の意図と不断に和解させる必要性に適ったものである。たしかにこれらの集団が強固となり、実現可能なより理性的な社会形

態と矛盾するようになればなるほど、公的意識はその非合理的側面に向けて影響が及ぼされ、一般の人びとの理論的水準を引き上げることは、ますます取るに足りない役割しか演じないことになる。ホルクハイマーは、すでに初期の市民的運動が、精神と理性に対する態度において動揺しており、しばしばそれらに対する強い嫌悪を示していること、ただしこの反ヒューマニズム的で、到達された知的水準を押し下げ、野蛮化する契機がはつきりと優位を獲得するのは、歴史も後になってのことだと指摘している。

以上の諸カテゴリーを用いてホルクハイマーは、先に挙げた四つの市民的反乱の構造を記述していく。そのなかで彼は特に、その運動が、社会に対する個人の要求を、不満な個人に対する道徳的・宗教的要求へと転換させるという傾向を次第に強く示すさまを印象深く記述している。以下ではこの心的エネルギーの変換、衝動の内面化という事態に対するホルクハイマーの論究のうちから、衝動の内面化の手段に関する彼の分析と、その事態と密接に結び付いた、市民的精神の非合理的側面の分析だけをごく大まかに記述・検討しておきたい。

ホルクハイマーが衝動の内面化の手段としてこの研究で特に着目しているのは、大衆集会における演説の機能である。彼によると、内面的回心への催告・呼びかけ、聴衆を人間的に変化させようとすることは、近代の雄弁術の本質に属し、半ば合理的な議論、半ば非合理的な支配手段である近代の民衆相手の演説は、市民的指導者の本質に属する。彼は、例えばサヴォナローラの雄弁が説教の聴衆、

さらには速記者を涙にくれさせ、後者にあつてはその仕事を不可能にしたこと、またルターの力強い言葉には、彼のその時どきの連合の相手の利害がよく現れていること、あるいはまた、カルヴァンの支配下では大衆集会が頻繁に行われ、また半強制的な性格を持つていたこと等を指摘するなかで、この演説が、一方で、いわば人間の内面的構造の変革をめざすものであることを際立たせ、他方でその支配手段としての機能を明らかにしている。

特に宗教運動との関連で彼は、托鉢修道会と都市との関係に言及している。彼はこういつている、説教を媒介して行われた宗教思想の発展と、経済的に制約された市民階級の上昇との弁証法的過程の一つの重要な媒介となるのが、大衆の欲求と衝動の内面化である、と。ところで、こうした近代の大衆集会における演説の機能の分析は、その後、ホルクハイマーのコロンビア大学での講義でも取り上げられ、¹⁶近代社会の、とりわけその危機の時代における大衆操作のひとつの重要な媒介としての演説の意義に注意が促されている。ちなみにこうした視座と、さらに「啓蒙の弁証法」の「反ユダヤ主義の諸要素」の章で展開された精神的な心的ダイナミクスの理論は、ホルクハイマーが「偏見の研究」のシリーズを主宰する際の理論的基礎となつていふことを言い添えておきたい。

さて、内面化にまつわる心的事態の理解は、市民的 spirit の非合理的側面に対して光をあてることに寄与する。市民的な大衆運動の力学のなかでは、将来支配権を握ろうとする指導者とその派閥が、単に古い権力と戦うだけでなく、自分たち相互の間でも激しく戦うのが

みられるが、この抗争、個人的敵意、支配欲と復讐心の激情は、市民的指導者に特徴的なものである。そしてホルクハイマーはそのなかに、彼らの精神に対する敵意を見いだす。彼がいうように、カルヴァンは、人間の心のあらゆる思念は邪悪なだけだと厳しく教え込んでいるし、ルターは、理性を口汚なく罵ることでは限度を知らず、また享受と精神との間の深い関連をうすうす感じとり、そして両者に同じ憎悪を浴びせている。よく知られているように、プロテスタントイズムの影響を受けた地域では、偶像崇拜に対する戦い、さらに所業による成義に対する戦いのため、学問や芸術は著しく阻害された。そしてここでホルクハイマーは、その際第一に敵意が向けられたのは、内面化と関連する道徳概念に反するものだったことを指摘する。すなわち、とりわけ芸術のなかの性愛を想起させるすべてのもの、贅沢一般である。

彼はこうした現象を、マックス・ヴェーバーが際立たせた市民的精神の合理主義的性格に負けず劣らずその精神に結びついている、その非合理的性格の現れと把握する。そしてさらにこの非合理主義に数えられる現象として、純潔の象徴としての子どもものの感傷的賛美に言及する。彼によるとそれは、衝動生活の強制的内面化の手段であると同時にその表現である。つまりそこでは、欲望からの自由、すなわち自分自身が行わなければならない辛い禁欲が苦もなく表現されている、そういう欲望からの自由が、子どもになすりつけられているのである。若者は、人間の無限の可能性の保証としてではなく、「純潔」、「無垢」、「無邪気さ」の象徴として理想とされるのであ

り、この社会が、単に子どもに対してだけでなく自然一般に対して持つに至ったイデオロギー的關係、すなわち素朴さ、「墮落していない」自然、郷土、農民の理想化は、内面化のメカニズムと密接に関係しているとホルクハイマーは言っている。

ホルクハイマーによる市民的大衆運動の構造分析は、市民的道德のイデオロギー批判を構成する構造的諸メルクマールを、純粹に理論的な分析におけるよりも具体的に把握することをめざすものであるが、先に述べたようにそれは、ナチズム運動の構造分析を念頭においたものでもある。この研究の執筆時点でのホルクハイマーは、ナチズムもこの種の運動のくり返し、しかし運動の進歩的機能が市民階級の能動性ともはや結びついておらず、市民階級に支配される階級へと移ってしまったため、グロテスクに歪められたくり返しとみていた。ナチズム把握におけるポナバルティズム論との関係も含めて、もつと検討されてよい視座であろう。社会研究所のその後の共同研究に対する意義については、すでに触れた通りである。以上の考察から、ホルクハイマーが彼本来の人間学的関心の追究に關して引き出す結論を明らかにすること、これが次節の課題である。

IV 結び——ニーチェの問題とホルクハイマー

ホルクハイマーは市民的道德のイデオロギー批判を遂行すること、市民社会の人間学の問題の理解に、ニーチェを代表とするような市民社会の「暗い」思想家たちとは異なる位相と拡がりをつく

り出した。彼は、仮借のないエゴイズムは、近代の公認道德のいうところとは裏腹に、この時代の日常生活の一つの本質的特徴をなしていること、逆にいえば、自己保存を原理とする市民社会の状況が禁欲的道德と、矛盾すると同時に相互作用するものであることを、歴史分析も含めて印象的に描き出した。とりわけ市民的指導者の役割をみることで、大衆の欲求の内面化という事態に分析の光が投げかけられる。大衆は、指導者に導かれる形で階級社会の新しい局面に組み入れられる。この過程は同時に、より高度な社会秩序の前提が発展させられる、社会の進歩をも意味している。しかしホルクハイマーは、前の方の否定的契機は、この時代が持続する限りそれに固有の人間学的帰結を持つていふと云う。ここから、ニヒリズムやルサンチマンといったニーチェが剔抉した問題は、ホルクハイマー独自の解釈を受けることになる。

ホルクハイマーの分析に従うと、市民的指導者に導かれた大衆のエゴイズムは充足されることが許されず、彼らの要求は内面的醇化、服従、帰依、献身へと押し戻され、愛情と承認は、個人から引き剥がされて悪魔のように誇張された指導者、崇高な象徴、大げさな概念の方へ向けられ、自分の要求を持った自らの存在は根絶されるから——理想主義的道德はそこに向かう傾向がある——、疎遠な個人も取るに足りないものとして経験され、そもそも個人というもの、その享受と幸福は、軽蔑され、否定される。大衆の一人ひとり支配している自らの絶対的無価値という感情は、支配的イデオロギーと、それとは矛盾する現実の絶え間の絶え間の経験、貧しさ、厳しさの経験

によって規定されている。だからホルクハイマーは、近代精神の歴史全体を貫く人文主義は、二重の面相を示していると言ふ。

それは直接には、人間を自分自身の運命の創造者として賛美することを意味する。けれども、それが広まった社会では自己決定の力は不平等に与えられている。内的エネルギーが外的運命に依存するのは、外的運命がエネルギーに依存するのに劣らないからである。そこから、人文主義の持つもう一つの、人間敵対的な側面が明るみに出てくる。ホルクハイマーによると、人文主義によって美化された抽象的な人間の概念が、その現実の状況から隔たつていなければならないほど、大衆個人には自分自身がますます哀れに映らざるを得ず、偉大さ、恩寵に恵まれた人格、指導者等々の概念に明示される人間の理想主義的神化は、ますます強く具体的な個々人の自己卑下、自己軽蔑を生み出した。ホルクハイマーは、その場合、個々人に映し出されているのは現実にすぎないと言ふ。

すなわち、最も幸福な人でさえ、次の瞬間には、人間社会内部の原因によって最も不幸な人、最も貧しい人と同じになることがあり得、不幸が唯一正常な、不確かでない状態であるとするなら、具体的個人にとつて事情が大きく異なっていることはあり得ない。尊敬を得ているのは、状況なのである。だからホルクハイマーは、人間を道徳的に粉砕する情熱、この世の哀れな虫けらである人間の虚栄に対する憎悪、陰鬱な予定説を具えた宗教改革は、市民的人文主義の敵対者であるというより、むしろその持つ人間敵対的な側面だと言ふ。それは大衆のための人文主義であり、人文主義そのものは、

上流社会の人のための宗教改革だというのである。

以上の考察を踏まえ、大衆の状況がますます絶望的となるのを眼前に、ホルクハイマーは個人に残された選択肢は、次の二つのうちからの選択だけになったと判断している。まず第一は、現実の情勢に対する意識的闘争である。彼は、この戦いには市民的道德の積極的な要素である自由と正義の要求が直接含まれているが、そのアイデアオロギーの実体化は破棄されているとする。第二は、この道德とそれに適合した位階秩序への不壊の信仰告白である。これは自らの具體的存在に対する密かな軽蔑と、他者の幸福に対する憎悪に行き着く。ホルクハイマーは、近代の歴史上、快活で幸福な者すべての實際の根絶、野蠻と破壊という形でくり返し現れたこの後者の傾向を、市民的ニヒリズムの現れとみるのである。以下、この問題を非常な歴史的時点でのテロという現象の解釈を通して考察する彼の議論を、ごく大まかに追ってみた。

彼によると、テロの「合理的」目標は、敵対者を萎縮させることにあるとすると、そのもう一つの、首謀者に意識されるとは限らない意図は、自らの支持者を満足させるところにある。そしてこの第二の要素は、道德に媒介された禁欲への強制と結びついた、幸福一般に対する深い軽蔑、憎悪に対応している。すなわち、反乱に引き入れられた大衆が、秩序が戻った後には意味と喜びに満ちた生活が始まり、苦しみが終わると信じているなら、彼らの満足のためにテロは必要ないであろう。彼らを待っているのは辛い仕事、劣悪な賃金、正直であるために何の犠牲も払う必要のない者に対する事実

上の従属と無力なのであり、だから反乱の時期に大衆の個々人が正当と感じ、かつ要求する平等とは、彼らに対して力をこめて賛美される慎ましい生活へとすべての者が貶められるということである。

享受、あるいはむしろ、彼らが青春以来自らの内部で抑圧すべく努力しなければならなかった享受の能力からしてすでにそんなに有害であるなら、憤りが消え、自らの断念が真実であることが証明されるためには、この悪徳を体現し、容姿・衣服・態度という存在全体でそれを想起させるものも、抹殺されるべきである。享受が価値あるものであり、断念の光輪は空想のなかにしかないとするなら、大衆個々人の生活の全体は、彼自身に誤ったものと思われざるを得ないだろうからである。ホルクハイマーは、一日天下を握った小市民が、この際できることはみんなついでにやっつけてしまおうとする不器用でせわしない試み、自分が想像するようなオルギアの模倣によって示しているのは、強情に有徳者ぶる成り上がり者が持つのと同じ、人生を誤ったのではないかという内面的不安だと言う。

彼によると、常に心が問題なのである。密かな好奇心と拭いがたい憎悪に駆られて、人間たちは彼らには縁遠いものの背後に、彼らが進み入ることのできない扉の背後に、他意のない結社やセクト、修道院の外壁や宮殿のなかに、禁じられたものを探し求める。疎遠なもの概念は、禁じられたもの、危険なもの、忌まわしいもの概念と同義であり、そして敵意は、敵意を持つ者が、自らの硬直化した性格のため、この禁じられたものは自分自身から取り返しのつかない形で失われてしまったと感じれば感じるほど、ますます致命

的なものとなる。ホルクハイマーは、貴族に対する小市民的ルサンチマンとユダヤ人憎悪には似たような心的機能があるという。王侯貴族の愛人に対する憎悪、貴族的生活に対する軽蔑、ユダヤ人の不道德、快楽主義や唯物論に関する憤怒の背後には、それらの代表者の死を求める深い性愛のルサンチマンが潜んでいるというのである。自らの存在の意味にいまも疑いをはさむ彼らは、できる限り苦痛を味わった上で抹殺されることになる。

市民的世界ではたいていの人にとつて、すべての人は等しく無価値であり、これ以上のものであると思うや否やそこへと連れ戻されるという、個人的運命に対する情け容赦のなさが定めとなつている。それはあらゆる人の眼前にギロチンを突き付け、大衆にはそれに加えて、この上なく満足した全能の感情を与える。彼ら自身の原理が権力を握るからである。ホルクハイマーは、ギロチンは否定的な平等の象徴であり、そして引きずり下ろすという意味での「平等化」の意味がフランス革命のような進歩的な運動にも現れており、そのテロの罪は、サドマゾ的な心的状態にも帰すべきものだと言っている。¹⁷⁾

以上、市民的道德の否定的な人間的帰結をめぐるホルクハイマーの考察を追つてみた。ホルクハイマーによる市民的道德のイデオロギー批判は、ニーチェの問題を、そうした問題を生み出すシステムとの関連で、さらに精神分析が切り拓いた心的メカニズム解明の成果を取り入れることで、社会という新たな水準で科学的に追究したものと理解することができよう。同時にこの認識は、残忍性を合理

化への強制から解放し、それにより意志の盲目性を克服、それを理性的に支配可能なものとすることに寄与する。彼に目標としてあるのは、享受を、残酷な心の動きの満足も一緒に含まれている最大限の幸福を求める、内面化とは逆の意味での人間の変化としてのエゴイズムである。このこととならび彼は、唯物論的道德理論は当時の歴史的・社会的段階でどのように考えられるかについて思索を続けていたと考えられる。¹⁸⁾ 本稿は、三〇年代の彼の人間学的研究のうち、市民的道德批判をテーマとする研究を検討・考察したところで、ひとまず筆を擱きたいと思う。

注

- (1) 以下を参照されたい。メルローポントイ『弁証法の冒険』滝浦他訳、みすず書房、一九七二年。
- (2) 以下の拙稿を参照されたい。森田数実「ホルクハイマーにおける批判的理論の構成問題」、『東京学芸大学紀要』第三部門、社会科学、第五〇集、一九九九年、掲載予定。
- (3) 以下の拙稿を参照されたい。森田数実「ホルクハイマーの社会理論(2)」、『徳島大学教養部紀要』人文・社会科学、第二六巻、一九九二年、所収。
- (4) 森田、「ホルクハイマーにおける批判的理論の構成問題」を参照されたい。
- (5) Cf. Horkheimer, Max, > *Autorität und Familie*, in: *Kritische Theorie*, Bd. 1, Fischer Verlag 1968. (邦訳、マックス・ホルクハイマー「権威と家族」、『批判的社会理論』森田数実編訳、恒星社厚生閣、一九九四年、所収。)

- (9) Cf. Horkheimer, Max, > Egoismus und Freiheitsbewegung <, in : *Kritische Theorie*, Bd. 2, Fischer Verlag 1968. (邦訳『マンヌ・ホルクハイマー「エゴイズムと自由を求める運動」』『批判的社論』所収。)
- (7) Cf. Brief Adornos an Horkheimer am 29. 6. 1936, in: Horkheimer, Max, *Gesammelte Schriften*, Bd. 15, Fischer Verlag. これはホルクハイマーのエゴイズム論文の読後すぐに書かれた手紙である。さらに、アドルノがホルクハイマーにニーチェ論の執筆を促す手紙として以下のものがある。Brief Adornos an Horkheimer am 23. 4. 1937, in: Horkheimer, Max, *Gesammelte Schriften*, Bd. 16, Fischer Verlag.
- (8) 一ひだけ例を挙げるに、アドルノのヴァーグナー論は、ホルクハイマーのエゴイズム論を真摯に書かれてゐる。Cf. Adorno, T. W., > Versuch über Wagner <, in: Adorno, T. W., *Gesammelte Schriften*, Bd. 13, Suhrkamp Verlag.
- (6) Cf. Horkheimer, Max, > Montaigne und die Funktion der Skepsis <, in: *Kritische Theorie*, Bd. 2. (邦訳『マックス・ホルクハイマー「モンテーニュと懐疑の機能」』『批判的社論』所収。)
- (10) Cf. Brief Katharina von Hirsch an Horkheimer am 3. 8. 1938, in: Horkheimer Max, *Gesammelte Schriften*, Bd. 16.
- (11) 「文化」の具体化の拒否、および幻想の破壊の後で働か出すホルクハイマーの弁証法については、例えば以下を参照されたい。Brunkhorst, Hauke, > Dialektischer Positivismus des Glücks. Max Horkheimers materialistische Dekonstruktion der Philosophie <, in: *Zeitschrift für philosophische Forschung*, Bd. 39, 1985.
- (12) Cf. Horkheimer, Max, > Egoismus und Freiheitsbewegung <, ebenda.
- (13) 市民階級の道徳的プロパガンダが、市民の上層階層の手下となるような者に反作用を及ぼし、人間と事物の搾取や処理が彼に喜びをもたらさず、全体への奉仕として現れざるを得なくなり、その結果彼は公然と、そうした搾取と処理の肩を持ち肯定するところのプロパガンダの機能については、次の箇所を参照。Horkheimer, ebenda, S. 12-13. (邦訳一〇四頁)
- (14) Horkheimer, ebenda, S. 13. (邦訳一〇六頁)
- (15) 彼による市民的反乱の構造分析は、F・ノイマンもいつているように歴史分析として優れたものであると思われるが、その詳細な検討は割愛せざるを得ない。
- (16) Cf. Horkheimer, Max, > [Funktion der Rede in der Neuzeit] <, in: Horkheimer, Max, *Gesammelte Schriften*, Bd. 12.
- (17) ついた考察の背景の一つとして、さうまでもなく学派の『權威と家族』に関する研究、とりわけフロムの提出したサドマンの性格の分析がある。
- (18) 以下の拙稿を参照されたい。森田敦実「モデルネの道徳理論」、『現代社論研究』第八号、一九九八年、所収。

Ideologie-Kritik der bürgerlichen Moral

Über die anthropologischen Studien Horkheimers in den dreißiger Jahren

(1).

Kazumi MORITA

Zusammenfassung;

In den dreißiger Jahren hat Horkheimer versucht, sein ursprüngliches anthropologisches Interesse aufgrund einer Gesellschaftstheorie weiter zu verfolgen. Im vorliegenden Aufsatz wird darauf gezielt, seine Kritik an der bürgerlichen Moral unter der Voraussetzung seiner anthropologischen Untersuchungen zu interpretieren, und die anthropologische Basis seiner Moralkritik herauszuarbeiten.

Zunächst wird versucht, seine Denkweise als Ideologie-Kritik zu charakterisieren. Diese Denkweise ist eine Konsequenz jener Geistesströmung, die die gesellschaftstheoretische und psychologische Dezentrierung des sich zu Unrecht autonom dünkenden Subjekts treibt und deren wichtige Vertreter vor allem Marx und Freud sind. Aus dieser Perspektive wird dann festgestellt, daß Horkheimer die asketische bürgerliche Moral in den Zusammenhang mit dem Lebensprozeß der bürgerlichen Gesellschaft bringt. Seiner Auffassung nach hat die bürgerliche Moral eine Doppelfunktion in der Gesellschaft, einerseits die Konkurrenz in dieser Gesellschaft zu beschränken und andererseits die Bedürfnisse der Massen zu verinnerlichen. Durch diese gesellschaftliche Doppelfunktion der Moral wird das widerspruchsvolle Tauschverhältnis der bürgerlichen Gesellschaft vermittelt. Weiter wird klargemacht, daß die Strukturanalyse der gesellschaftlichen und herrschaftlichen Funktion der bürgerlichen Führer Horkheimers Analyse der gesellschaftlichen und persönlichen Funktion der bürgerlichen Moral vertieft. In der bisherigen Horkheimer-Forschung ist der Zusammenhang zwischen dem Interesse Horkheimers an den dunklen oder schwarzen Denkern des Bürgertums wie Nietzsche oder de Sade und seiner Gesellschaftstheorie nicht gründlich behandelt worden. Hier handelt es sich um einen Versuch, diese Lücke der Forschung so weit wie möglich zu füllen.

Schlüsselwörter;

Horkheimer
kritische Theorie
Ideologie-Kritik
bürgerliche Gesellschaft
bürgerliche Moral